

国経研だより

神奈川大学 国際経営研究所
〒259-1293 平塚市土屋 2946
神奈川大学湘南ひらつかキャンパス
Tel. 0463-59-4111 (内線 2200)

「事業仕分け」と「黒船の襲来」

青木 宗明

ヨーロッパによくある移動遊園地か、はたまたピエロに先導されたサーカスカ。突如現れた臨時のお祭り会場には、たくさんのお客さまが詰めかけた。政府・行政刷新会議の「事業仕分け」を見学に訪れた国民のみなさまである。中には緊迫する仕分け作業をバックに、Vサインと笑顔で記念撮影するおじさま・おばさまのグループもいらっしやった。

この遊園地化・観光地化と対照的に、仕分け作業の環境はかなり過酷であった。11月後半、東京・市ヶ谷の体育館（政府関係組織の研修所）は、まさに底冷えの冷気が床から背中やお腹の上を進軍して上昇を続けた。しかし作業する仕分け人に配られたのは、1枚の膝掛け毛布と使い捨てカイロだけ、足下にあるのはいわゆる便所スリッパだったのである。

いずれにしても、「事業仕分け」に対する一般の評価は賛否両論であろう。省庁や外郭団体（独立行政法人）の無駄な予算が容赦なく斬られてゆくのは、国民の多くにとってまさに快哉だったようである。わが国民は、世界の中で政府・公務員への批判に最も慣れ親しんだ国民だから、欣快を感じるのは至極当然なのである。あるいは、予算編成の透明化を高く評価する声もある。予算査定は、官僚同士（財務省・事業官庁）が密室で結託して行っていると思われていたが、それがビデオカメラの前でまさに白日の下に晒されたからである。

ただし逆に、次のような疑義や批判があるのも事実である。すなわち、「たった1時間で正しい判断ができるのか?」、「事前の調査・ヒアリングはちゃんとやったか? 事業の知識を十分得たか?」、「マーケットに乗れない<公益>があるため数値評価できない政府サービスをどんな基準で評定するのか?」、「実態をよく知らない素人衆の間違った評価で将来への芽が摘まれてしまうのではないか?」等々である。

このような疑義は、部分的にせよ批判として間違い

なく正しい。ただし、だからといって「正論」とは言えないのが、「事業仕分け」の難しいところである。なぜならば、事業を熟知する人間が予算査定するのが最善の方法であることに疑問の余地はないが、事業を知れば知るほど予算を削減するのが難しくなるのも、世の常として明白だからである。

事業に携わる部内者（この場合は公務員）がみずから予算カットを言い出さないのは、利己的な人間社会の行為として十分理解できるだろう。これに加え組織外の人間であっても、事業を熟知してそこに利害関係を有する場合には、経済行動としての選択は部内者とまったく同じになる。当該事業の「インサイダー」として、みずから予算の縮減や事業効率化を口にするインセンティブは一切持ちえないのである。

みなさんの周りを見回してみたい。事業をよく知る部内者と「インサイダー」は分かっているだろう。「これ無駄だよなあ・・・でもまあいつか。いままでもやってきてるし、でも無駄だよなあ・・・」。分かった上で善良な人は悩む。しかし無駄を斬る勇氣は起きないし、個人の損得を勘定すれば、青二才の倫理観を表出するのはあまりにもお人好しに過ぎる。かくして部内者と「インサイダー」には、「無駄取り作業」は著しく困難、ほぼ不可能に近い作業となるのである。

そうなると事態を変えるきっかけは、組織が政府だろうが民間だろうが「黒船の襲来」しかなくなる。「黒船」とは、経営上の危機（政府の場合は財政難）であり、襲来とは、外国人（部外者）による情状の斟酌なき無理矢理の経費削減である（政府の場合、小泉・竹中改革のような新自由主義・市場原理主義に依拠する極端なサービス縮減や廃止）。

ここまで明らかになって、大丈夫ですか、あなたの会社は? 「黒船の襲来」は近くないですか? 「黒船」が突然現れると大変なことになりますよ。沖合に船影が見える前に、何か少しでも変えておくべきなんじゃないですか? でもみなさん、部内者ですものねえ・・・難しいですよええ・・・。（所員/あおき・むねあき）

公開講座&パネルディスカッション実施報告

「伝統のなかの革新—見えない資源に着目して—」は、広島から広島大学 大学院社会科学部研究科教授井上 善海氏および株式会社白鳳堂 取締役統括部長高本 光氏の2名および地元から株式会社セラリカNODA 代表取締役社長野田 泰三氏をお呼びし、新装なった建物のサーカムホールで12月4日金曜日の午後から夕方にかけて実施された。講義の一環としての役割もあったので、80名を超す経営学部、理学部の学生が出席した。また30名を超す地元企業の経営者、管理者たちも駆けつけてくれた。ここに当日の臨場感あふれる雰囲気をも再録する。

I

講師の方々への講演内容はもちろん、運営、進行、看板など多くのことを学ぶ機会を得ました。慣れた手つきでの設営、きびきびした進行、メリハリの利いた開会、閉会のあいさつにもプロらしさを感じることができました。基調講演の井上先生が問題提起とパネルの冒頭の二段階に分けたご報告をされていたのが、話題の整理になりました。結果として理解度が大きく増しました。会議所主催のシンポジウムでも大いに参考になると思いました。

パネルディスカッションでは、林先生が各質問を原材料⇒生産⇒マーケティング⇒未来と順序だてた論理の組み立てをされていたのには、心底驚き、感銘を受けました。林教授のコーディネートの大きさと巧みに改めて驚きを感じました。「さすがプロフェッショナル!!」と、心のなかで拍手をしていました。またフロアからある教授の鋭い質問に、高本氏が淡々と答えておられた姿に経営者の顔の一面を垣間見た気がしました。

ひとつ残念だったのは、社会人からの質問が多く取り上げられ、学生からの質問が比較的少なかったことです。学生ならではの視点をもっと聞きたいと思いました。しかし取りあげられた学生の質問は素直で良質な内容のものが多かったような印象を受けました。すばらしい経験の機会を得て、本当に良かったと思います。ありがとうございました。

(平塚商工会議所/ふくおか・ちあき)

(編集者コメント：懇親会の席での報告者の意見では、異口同音に「今日の学生さんの質問の質の高さには、正直驚いた。企業人も顔負けの内容があった。」とのことでした。主催、運営に携わった一人として、思わず“にんまり”そして、“やったあー”)

II

企業経営に携わる一人として “伝統のなかの革新”

を拝聴した。お二人の経営者の特別講演は、それぞれパンチの効いた内容で感銘を受けた。まず白鳳堂の高木光取締役のお話は、化粧筆という地味な製品を、こだわりの経営哲学を維持しながら決して周囲に迎合することなく持続している姿がお話しの中からうかがえた。テレビでよく紹介されている全国区の企業であること、しかも高木氏自身テレビによく登場する方であることを、恥ずかしながら講演会後知った。井のなかの蛙になってはいけないと、つくづく思った。

もうお一人のセラリカNODAの野田泰三社長は、“百年企業”の経営に従事しておられる方であり、それなりの趣と哲人の風格をもっていた。一つひとつの言葉に重さがあった。蠟の製造加工範囲を質的に進化させている。蠟のルーツはお相撲さんの髷(まげ)の整髪に使われていた。それが社長の“飛んだ”そして“跳んだ”発想で、プリンタートナーや電子機器のコーティングにも使われるようになっていて、とのお話しをうかがった。

現実とは現実として受けとめ、その現実をどのように転換し変質させ、社会や環境との連動を図るかは、まさに経営に携わるヒトの考えや行動にかかっていることを改めて知ることになった。地元にいながらこのようなお話をお聞きできたことに感謝します。

(サムシステム/やました・ひろし)

国際経営研究所主催

「ベンチャー力発信トークライブ」実施

神奈川県産業活性化課の要請を受け、11月27日(金)の2限の松岡 紀雄教授担当講座「企業力入門」の時間を利用して、「ベンチャー力発信トークライブ」が2時間にわたって、開催された。この企画は5月に慶応大学SFCで開かれたイベントに続くものであった。

今回のトークライブの特徴は、①ゲスト講師が株式会社ナノエッグ代表取締役 大竹 秀彦氏と株式会社LoiLo 取締役 杉山 竜太郎氏の両名、そして両社の若手社員、いずれも県内で数年前に誕生したばかりの企業なので、社員も企業も共に若いということ、②トークライブの形式をとっているの、シナリオはあってもないのと同じで、自由に語りあう雰囲気が新鮮であること、であった。

ベンチャー精神あふれる二人の経営者とまるで友人のように親しげに語り合う若手社員の姿に、200余名の学生は、大きな驚きと感動をもったようです。

ファイナンスという分野について

菅野正泰

体である家計を仲介する銀行行動を中心に展開される。

(1) の投資理論はさらに二つの分野に分けられる。その一つは資産価格論であり、資産価格をどのように決定するか、また投資家の富をどのように金融資産に配分するか、といった経済学的分析である。この分野でマーコビッツやシャープは、1990年にノーベル経済学賞を受賞した。もう一つは、派生証券論であり、すなわち、金融派生商品＝デリバティブの価格評価に関する学問である。デリバティブは、元になる金融資産の価格の性質が与えられると、“ただ飯は許されない”とする無裁定理論により、資

産の組み合わせで価格を決定することができる。この分野でマートンとショールズは、1997年、オプション評

価モデルにより、ノーベル経済学賞を受賞した。彼らの業績は、癌で亡くなり受賞を果たせなかったブラックとともに、ブラック＝ショールズ＝マートンモデルと称され、金融の現場で今なお使われている。

さて、金融リスク管理における様々な問題を解決することが目下の研究の中心である。ひとえにリスクといっても、信用リスク、市場リスク、オペレーショナルリスク、保険リスク、統合リスクと様々あり、中々一筋縄ではいかない。ファイナンスが学際的な領域といわれる所以であろう。更には、一番肝心な自分の健康リスクをコントロールすることを忘れずに、研究に一層の精進をしなければなるまい。

(所員/かんの・まさやす)

今次金融危機の引き金として引用されるCDO(債務担保証券)など、複雑な証券化商品の開発を可能にしたのは、金融工学である。金融工学は、金融における工学的アプローチの総称であり、将来の不確実な事象を数学・統計・IT技術などを駆使して分析する複合領域の分野である。このため、最近、金融機関の現場でリスク管理や証券運用など金融工学を活用して働いている者には理科系出身者が多い。

2009年4月から大学の専任教員の職について、専門分野は何かと聞かれると、金融工学ではなく、ファイナンスと返答する人が多い。これには理由があつて、金融工学という言葉は、ファイナンスと同義語として使われる場合もあるが、人によっては非常に狭い意味に捉える場合がある点と、自分の研究分野が金融規制などいわゆる文系的な部分も含むため、ファイナンスの方がよりの確に自己表現できるためである。

とはいうものの、ファイナンスが何であるか、大方の人にとって、往々にしてあやふやである場合があるので、ここで簡単に整理したい。欧米の大学、特に米国のビジネス・スクールで教えられているファイナンス・金融系の科目は、ファイナンス系が、(1) インベストメント(投資理論)、キャピタル・マーケット(資本市場論)と、(2) コーポレート・ファイナンスである。一方、金融系は、(3) 金融論、銀行論である。ファイナンスが金融システムにおけるミクロ的分析であるのに対して、金融論は、最終的な赤字主体である企業と最終的な黒字主

研究余滴

第5回 経営革新講座実施報告

平塚商工会議所の支援を得て自主勉強会の形でスタートした経営革新講座は、今年度第5回を迎え11月7日(土)の午後、商工会議所大ホールで開催された。今年の統一テーマは、「地域の経営に、今、必要なこと - だが、なにを、どこで、だれと -」であった。市民に経営の感覚をもってもらおう、という意識が企画の根底にあった。講演者は理学部教授で学長補佐を兼務されている日野 晶也氏と株式会社 玄の代表取締役社長井出 隆夫氏の2名であった。以下、会場からの印象記2名。

I

第1回目から参加させてもらっています。今回は例年になくユニークな講師の方お二人からお話を伺いました。理学部の日野教授に対しては、地域の経営になぜ理の先生なのかなあ、と当初思っていました。お話を聞いて納得です。その秘密は、共生と進化にありました。勝ち負けの競争が過剰になり一人勝ちをめざすことは、人間以外の生き物ではないということが分かりました。無駄なエネルギーを使うことなく共に生きる道を探ることが大切であることを改めて教えていただきました。

進化についても新しい発見がありました。それは現在主流である種は、ある一定条件下での的確な生き方ができるけれども、状況が変わったときに迅速な適応ができなくなり、舞台から降りることになる、ということでした。無駄な競争はほどほどにして、みずから舞台を降り、つぎに備えることもまた生命持続にとって重要な行動の1つであるというのは、目から鱗でした。(神田交通/いのうえ・まさみ)

II

理髪業を営む玄の井出 隆夫社長は、公私ともに乱高下の体験をくぐり抜け、今日の安定成長期を迎えているという稀有な体験をお話しされた。講演当日も常連予約顧客の理髪を済ませてから、講演会場にお出でになったということでした。いわゆる床屋さんとしてユニークなのは、専門学校を経営しておられ、全国からジュニアを中心に将来のパーバーを育てていることではないかと、思った。遠隔地からの学生は寮に住まわせながら学校に通わせているということである。

井出社長の生き方を垣間見ていると、あらかじめ遠い将来を見据えて現在の行動を設計するというよりは、むしろ行き当たりばったりで壁にぶつかったらその都度突破する方法を経験的に備えておられるようである。勉強してきた範囲の言葉を使えば、「創発型」を指向しておられるのではないだろうか。

とにかくたくましくしかも苦労したことをそれほど

態度に表わさずに、自然体で経営されている姿に感銘を受けた。統一論題との関係でいえば、出井社長の地域は平塚や湘南をはるかに超え、全国区いや海外までも射程距離においた理髪業を展開されている。製造業の範疇にいるわれわれも、うかうかしてられないという印象をもった。(タシロ/たしる・ゆうじ)

(企画者コメント:当初、経営学部OBとOGからの報告も予定していた。あいにく2人とも新型インフルエンザにかかり、当日欠席の状態で行進せざるを得なかった。代理をたてる間もなかったというのが実態である。①一般市民向けとしては、やや難解であったのでは、②聞いて見たいという“ときめき”感が希薄であった、などの辛口コメントをいただいた。80名程度の参加者であった。集客には必ずしも成功した企画とはいえなかった。真摯に反省し、来年度に備えるつもりである。)

研究所サロンのご案内

懸案となっていた研究サロンを下記の日程で開催します。経営学部、大学院経営学研究科の共催およびSHCの構成パートナーである総合理学研究所の協催によるものです。

- ・ 講師: 松枝迪夫氏(弁護士、元神奈川大学教授)
- ・ テーマ: 私の弁護士歴五十年 — 教歴を活かして —
- ・ 日時: 2010年3月3日(水) 判定教授会終了後(詳細は後日お知らせします) 1時間半程度
- ・ 場所: 11号館第4会議室

この研究サロンの特徴は、①夕刻からの開始で自分の好きな飲み物、音のでないスナック持参であること(講師の先生にはあらかじめ了承を得ております)、②人生経験豊富な一流の研究者から、現役の研究者が調査研究の方法論を学ぶこと、③気楽な雰囲気です。学問領域の違いを超えた意思疎通および研究の根幹にかかわるノウハウの蓄積が図れること、にあります。

オフサイト: 場所を移動して余韻を楽しむ企画も用意します。こちらにも是非ご参加ください。しばし浮世の煩わしさを離れて悠久の世界へでかけましょう。

(連絡先: 国際経営研究所)

後記:「オリーブの首飾り」が誰もいない部屋に流れている。心豊かなひとときである。と思いきや無情な電話のベルが鳴った。現実に戻された。また騒々しい日々が始まる。次のmile stone めざして歩みを進めよう(E)。